

「せかい」

登場人物

イマ・・・高校2年生。16歳。進路に悩んでいる。

センス(過去)・・・イマの過去。6歳。精霊たちが見える。

シコウ(未来)・・・イマの未来。26歳。就職先に絶望し、転職を考えている。

キラリ・・・希望

ドク・・・孤独な冒険家

タッチ・・・心に触れるもの

「せかい」

舞台にはイマの後ろ姿。

椅子に座り、面談の途中のようである。

イマ

「はい。別にどっちでもいいです。」

「特に行きたい学部も、やりたいこともありません。」

「大学・・・には一応行っておきたいです。」

「なんでって・・・。やっぱり就職とかあるから。」

「はい。就職に強い学部がいいです。」

「だから、特にやりたいことはないんです。」

「・・・特に。」

「・・・いや、別に。」

「えっと、どっちでもいいです。」

「だったら、じゃあ、文系にします。」

「早く決めちゃいたいです。」

「はい、ありがとうございます。」

「・・・はあ。」

転

イマは途方にくれ、帰路につく。

イマ

「そろそろ、進路を。かあ。」

イマ

「そろそろってなんだよ。」

イマ

「何がしたいんだろう。なんで、みんな、そんなに急かすんだろう。」

スマートフォンを取り出し、検索をかけるイマ

イマ 「就職 大学」

イマ 「就職 大学 推薦」

イマ 「大学 就職 安定」

イマ 「大学 就職 お金」

首を傾げて

イマ 「・・・やりたいこと」

キラリが風となって舞台を駆け抜ける

椅子をイマの前に、持ってくる

もちろん、イマには、キラリは見えていない

イマ 「あ・・・キラッとした風だ。」

イマ 「・・・あのベンチ。座る人いるのかな。」

イマはなんとなく、椅子に腰掛ける。

椅子の前には水たまり

イマ 「昨日の雨、水たまりを作っていたんだ。」

ドクが孤独を連れてくる

イマ 「はあ。きたきた。独りぼっちの気持ち。」

イマ 「・・・どうして、こんなに不安定なんだろう。」

イマ 「不、安定。今に始まったことじゃないか。」

イマは水たまりに映る自分に話しかける

イマ 「ねえ、あんたは何がしたいの。」

今の目には涙が浮かぶ

水たまりの中で何かがイマに笑いかける

イマ、ぎよっとして

イマ 「・・・笑った？」

イマ 「まさかね。」

水たまりの中から声がする

キラリ 「いやー、見つかったー。」

ドク 「そりゃ、あんた、派手に騒いだからだよ。」

タツチ 「イマ！久しぶり！やっと見えたね。」

キラリ 「おかえり。」

イマ 「なにになになに。やだ・・・。」

ドク 「嫌じゃない嫌じゃない。」

キラリ 「おかえり。」

イマ 「へ？」

キラリ 「だから、おかえりって。」

イマ 「・・・た、ただいま？」

キラリ 「よくできました。」

イマ 「何これ。」

イマ、後ろを振り返る。

当然何もない

ドク 「聞こえてる？」

キラリ 「見えてる？」

タツチ 「そろそろ行こうか。」

3人の精霊がイマの前に姿を現す

イマ 「ワアアアア！」

イマ 「なんか、なんか出てきた！やだ。ちよつと！」

キラリ 「やだ、ちよつとじゃないよ！」

ドク 「そんなに嫌か。そこまで嫌か。」

タツチ 「腰抜かしているよ、大丈夫？」

イマ 「触らないで！！」

タツチ 「おっと。」

ドク 「嫌われちゃったんだね。」

キラリ 「ちよつと見えていない間に。」

イマ 「何いってんの？」

キラリ 「ダメだ、ちゃんと証拠見せてあげないと。」

ドク 「全然信じてないよ。」

タツチ 「そりゃそうでしょう。ちょっと待ってね。キラリ、センスを呼んであげて。」

キラリ 「はいはい。ってあれ？ああ、もう、あの子どもいったの？またちよこまかして。」

ドク 「鉄砲玉みたいな子だからね。センスは。」

タツチ 「まーたどっかいっちゃった？」

キラリ 「ははは。みたいだね。」

ドク 「よーし、探そうか。」

タツチ 「そうこなくっちゃ!!！」

3人の精霊はまるで子どものように駆け出し、姿を消す

舞台には狐につままれたような顔のイマが一人

イマ 「なんだったの・・・。」

イマ、自分の顔をつねってみる

イマ 「いた・・・くない？」

自分で自分の足を踏んでみる

イマ 「痛くない!!！」

イマ 「ヤバイヤバイよこれ！なに？」

イマ 「私、どうなっちゃったの？怖い・・・。」

イマ、色々なものに触れてみるが、感覚がなくなっていることに気づく。

イマ 「やだ・・・。」

ドク 「まただよ。もう今日で『やだ』何回目？」

いつの間にか、ドクが戻ってきている

イマ 「いやあああ！」

ドク 「イマ、落ち着いて。」

ドクはイマを支える

イマ 「え？あ、え？」

ドク 「どうしたの？」

イマ 「私に触ってる？」

ドク 「触ってるよ。」

ドクはイマに手を差し出す

イマは恐る恐る手に触れてみる

イマ 「やっぱりだ。いやあああ。」

ドク 「どうしたの？」

イマ 「感覚が、感覚がないの。」

ドク 「感覚？」

イマ 「触れている感覚。ほら、顔をつねっても、痛くない。」

ドク 「そうみたいだね。」

イマ 「なに、私、どうなってるの？」

ドク 「どうなっていると思う？」

イマ 「あ、そうか、夢か。これ、夢だ。」

ドク 「夢ね、いいんじゃないかな、イマ。いいと思うよ、その考え。僕は好きだな。」

イマ 「夢かあ。なんだ。あーびっくりした。そりゃそうだよね。いきなり水たまりが喋ったり」

ドク 「喋ったのは僕らだけだね。」

イマ 「そっかそっか。夢か。あれ、私、どこで寝ちゃったのかな。起きろー。」

ドク 「解決したのかはわからないけど、元気になってよかった。」

ドク 「ねえ、感覚って言ったよね。」

イマ 「うん。」

ドク 「今、イマの感覚がないって、どういうことなんだろうね。」

イマ 「どういふことって？夢だからでしょ。」

ドク 「なるほど。」

イマ 「てゆうかさ、私の夢に出てきている、あなた。ダアレ？」

ドク 「やっと聞いてくれたね。」

イマ 「え。」

ドク 「さっきから自分の話ばかりして。」

イマ 「・・・あ、ごめんなさい。」

ドク 「わかればよろしい。」

イマ 「いや、でも私の夢なんだから」

ドク 「私の夢って決めつけているのは、イマ、君一人だけだよ。」

イマ 「え？」

ドク 「いや、まあいいや・・・えっと、僕のことを聞いてくれたんだよね。僕の名前はドク。」

イマ 「ドク・・・。」

ドク 「さっき、自分で僕を呼んだんじゃない。」

イマ 「え？」

ドク 「独りぼっちの気持ち。」

イマ 「ああ！」

ドク 「僕はね、冒険家なんだ。みんなといることが嫌いなわけじゃないんだよ。だけどね、時々一人になりたくなる。孤独になることで、自分を落ち着かせるんだ。」

イマ 「冒険家？」

ドク 「冒険は一人で出るものだろう。」

イマ 「そうなの？」

ドク 「そりゃ仲間が必要さ。だけど、人は時々一人で冒険に出ることが必要となる。」

イマ 「ひとりで冒険かぁ。」

ドク 「君のここにあるものと同じだよ。」

イマ 「どこ？」

ドクがイマの胸を指差したところで小さな子供がかけてくる

センス 「ワアアアイ!!!」

タッチ 「あーもう、負けた！」

キラリ 「本当に、センス速すぎる!!!」

後から、タッチとキラリがかけてくる

センス 「風よりも速かった！」

キラリ 「速かった速かった。」

タッチ 「ああ、ドク、また一人で。」

キラリ 「抜け駆けしたな。」

ドク 「まあまあまあ」

イマ 「ああ、さっきの。」

キラリ 「ごめんねえ、イマ。証拠を見せようと思ったんだけど。」

タッチ 「思った以上にその証拠を捕まえるのに時間がかかった。」

センスは、あたりで遊んでいる

ドク 「この子はカコ。またの名をセンスという。」

イマ 「過去？誰の？」

キラリ 「イマ、あんたのだよ。」

イマ 「え？どういうこと？こんな子のこと、私知らない！」

キラリ 「嘘を言いなさんな。」

タツチ 「まあまあ、センスにはね、イマの姿は見えないんだ。」

イマ 「見えないって？」

タツチ 「私たちは精霊だからね、時間軸をちよいと操れる。」

イマ 「は？」

キラリ 「あーあ、昔はあんたももっと簡単に私たちのことが見えていたのにさあ。」

イマ 「何言ってるの？もう、なんて夢なんだろう。早く覚めないかな。」

ドク 「いいじゃん。覚めても、また苦しいよ。」

イマ 「え。」

ドク 「頭抱えてたじゃん。あのベンチで。」

キラリ 「だから、水溜りの中に気がついた。」

イマ 「・・・見てたの？」

タツチ 「ずっとね。」

イマ 「確かに・・・今覚めても、また悩むだけかもしれない。」

イマ 「・・・。」

イマ 「あ！あのワンピース！」

イマ、センスの着ているワンピースに気がつく

キラリ

「わぁ、気がついた？」

イマ

「これ、お母さんがくれたやつだ。」

ドク

「間違いないね。」

イマ

「この子が、私？」

ドク

「どうだい。自分自身を外から見てみるのは。」

イマ

「私、こんな感じだったんだ。」

イマ

「あのワンピース。お母さんがくれたワンピース・・・ちっとも気に入らなくて、裏返しにして着てたんだ。」

センス

「ほら！この方がオシャレでしょ！」

キラリ

「さっすがセンス！とても似合ってる！」

センス

「あとね、ここ。」

タツチ

「どこ？」

センス

「この・・・これ。切っちゃお。」

センス

「ジョーキジョーキジョーキ。」

ドク

「ああああ、切っちゃった。」

実際にワンピースの裾はきれておらず、他の方法で短くなっている

センス

「そうだ！」

タツチ

「今度は何を思いついた？」

センス

「お花つけよ。」

キラリ

「天才だね。」

センス

「ほら、ピンクになった。」

センス

「これは、ピンクでしょ。」

「これは、水色。」

「空は、黄色がかったオレンジ！」

「今日の地面は紫だね！」

「自動販売機は緑！」

「本当に綺麗。」

「ねえ、ドク。冒険のお話をしよう。」

「いいともさ。」

「ドクは今まで行ったことのある場所がいちばん好きなどころはどこ？」

「そうだなあ。あれは僕がこの国に生きていた時だった。」

「日本？」

「そう、日本。」

「ドクは、日本が好き？」

「ああ、大好き。」

「ふうん。」

「君は。」

「分かんない。」

「そうか。」

「でも、色はたくさんある。」

「そうだね。」

「ドクは日本で生まれたこともあったんだね。」

「僕はこの国で、16歳で命を落とした。」

「そうなんだ。」

「乗っていた飛行機がね、爆弾を積んだ飛行機だったんだ。」

「ドクはそれを知っていたの。」

「もちろん知っていたさ。僕の役目は、その飛行機で敵に突っ込んで、平和を取り戻すことだったんだ。」

「ふうん。」

「でも、当たらなかった。たどり着く前に、海に落ちちゃった。」

「それでも、この国が好きなの。」

ドク 「うん。好きだ。」

センス 「ねえ、死んだらどうなるの。」

ドク 「僕は自分の体が見えた。魂だけ抜け出したんだ。抜け出したら最後、もう二度とあの体に戻りたいとは思わない。」

センス 「戻りたくなかったんだ。」

ドク 「すごくキラキラしたワクワクが僕を包んで離さなかったんだ。だから僕は流れに身を任せ、体にさようならを言って、のぼっていったんだよ。」

センス 「キラキラしたワクワク・・・すごい!!」

イマ、センスと3人の精霊が遊んでいる姿を眺めながら

イマ 「ひとりぼっちの気持ち。」

ドク 「呼んだ?」

イマ 「キラッと光る風。」

キラリ 「なあに?」

イマ 「確かに、昔は全部見えていた。えっと、あと一つ、なんだっけ。」

イマ 「あ・・・。」

胸に手を当てるカコ（センス）

イマ 「急にゾワゾワするあの感じ。ドキドキとはちょっと違うあの感じ。こそばゆくて、強くなるとちょっと痛くなる。」

センス 「そのお話、私、覚えたよ!」

イマ 「正しいことを選ぶ時に感じるこの感じ・・・。」

センス 「こうした方が、楽しいよ!」

イマ 「自分に合うことを選ぶ時に感じるこの感じ。」

タッチ 「センス。」

イマ 「直感。」

タツチ 「センスって名付けたのはね、私だったんだよ。」

イマ 「センス……。」

タツチ 「覚えてる？」

イマ 「うーん。なんとなく。」

タツチ 「ありがとうね。」

センスは楽しそうに、ワンピースの裾を掴んで、引っ張りながらかけていく

イマ 「あのワンピース、私は全然気に入ってなかったんだ。だから、自分らしく着る方法を見つけた。そしたら……お母さん怒っ

たなあ。」

タツチ 「あの時、お母さんを傷つけたんじゃないかって、思った？」

イマ 「うん。いや……。」

タツチ 「ん？」

イマ 「今でも、時々傷つけちゃってるかも知れないって思ってる。」

タツチ 「ふふん。」

イマ 「うちの子はちょっと変わってるってよく言われる。」

タツチ 「……イマの中にもちゃんとして、センスがいるんじゃない。」

イマ 「センス……。」

いつの間にか、ドクとキラリも戻ってきている

イマ 「これが夢ではないってことが少しわかったよ。」

ドク 「おお！ そうなの。」

イマ 「うん……。だって、昔はみんなのこと、見えていた気がするんだもん。」

キラリ 「いっぱい遊んだじゃん。」

イマ 「でも、何で今の私に、この世界が見えたんだろう。ずっと見えてなかったのに。」

ドク 「それはね。」

3人の精霊は顔を合わせる

キラリ 「ミライの仕業だよ。」

イマ 「未来？私の？」

タッチ 「そう。またの名をシコウともいう。」

イマ 「シコウ。」

ドク 「思考。思っで考えるの思考だよ。」

イマ 「私の未来、思考か。」

ドク 「そう。」

イマ 「・・・ね、ねえ！！未来の私って何してるの？」

キラリ 「どうした、急に？」

イマ 「私は今、それが一番知りたいの！」

ドク 「お、おう。」

イマ 「一番知りたいことだったの！！」

キラリ 「あ、そう。」

イマ 「分かった！だから、みんなのことがまた見えたんだね！みんな、私を助けるために・・・」

タッチ 「イマ、ちょっと、落ち着いて。」

キラリ 「そうだよイマ、私たち、そこまでお人好しじゃない。」

ドク 「イマのことは、大好きだけどね。」

キラリ 「だけど、ちょっと違う。」

「シコウ、つまりイマの未来は、一度死んでいるんだ。」

イマ 「え？」

「そんなに驚くことはないよ。体を持った者は必ず死ぬんだ。」

「そうだけど・・・死んだの？いつ？え、私、死ぬの？」

ドク 「センスの時はすでに理解していたのになあ。」

タッチ 「過去では分かっていた。」

イマ 「一度死んでいる……。」

タッチ 「イマ。未来のことを考えたって意味がない。大切なのは、今だよ。」

イマ 「そうだけど……。」

タッチ 「シコウは、一回死んだって言ったけど。」

イマ 「うん。」

キラリ 「私も、ドクも、タッチも、みんな何度も死んでいるんだよ。」

イマ 「ああ、ドクがさっきセンスと話していた……。」

ドク 「僕はドク。この日本で特攻兵だったこともある。」

イマ 「こともあるって？」

ドク 「そのあとは、中国で御曹司、そのあとは……。」

イマ 「なるほど、何回も」

ドク 「生まれ変わっているってこと。」

キラリ 「私の名前はキラリ。イマが時々感じる、キラッとした風は私のことだよ。」

イマ 「キラッとした風。」

キラリ 「久しぶりに見えてくれて嬉しい！」

イマ 「キラリは？キラリの……前世は？」

キラリ 「前世というか、私たちは今、体を持たない精霊だから、前世って言葉があっているかは分からないけど」

イマ 「体を持たない……魂ってこと？」

キラリ 「その表現が一番しっくりくるね。」

イマ 「ねえ、昔はどんな体になっていたの。」

キラリ 「いくつかの体に入ったけれど、一番印象に残っているのは、ユダヤ人の子供だった時かな。」

イマ 「ユダヤ人……。」

キラリ 「生まれたのはヨーロッパだったんだけど、血筋はユダヤ人だった。それだけで、私はたくさんいじめられた。」

イマ 「……。」

キラリ 「そしてドクと同じ、16歳で死んじゃった。」

イマ 「……。」

キラリ 「シャワーを浴びようと思ったら、出てきた水が毒だったの。」

イマ 「……。」

キラリ 「あとはドクと同じ、キラキラしたワクワクに引っ張られて、魂だけになった。」

イマ 「なんでそんな辛い時のことが一番印象に残っているの。」

キラリ 「私、すごく楽しかったんだ。あの16年間。それに、あの国のことも、好きだよ。」

イマ 「……。」

キラリ 「こっちはタッチ。」

タッチ 「よろしくね。」

イマ 「タッチ……。」

タッチ 「急にゾワゾワして強くなったら痛くなる、あれです。」

イマ 「ああ。」

タッチ 「イマが何かを選ぶとき、決めるとき、いつも感じていたでしょ。」

イマ 「……確かに。」

タッチ 「凄く明確にわかっていたよね。自分がやりたいこと。」

イマ 「直感。」

タッチ 「本当に、あなたはセンスそのもの、センスの塊なんだよ。」

イマ 「タッチは？」

タッチ 「そうだね、アメリカで詐欺師をやっていた時が一番楽しかったかな。」

イマ 「詐欺師？」

タッチ 「『他の二人と全然違う！』って思ったでしょ。」

イマ 「あ、うん。わかった？」

タッチ 「私だって、色んな人生を繰り返してきたよ。私だけじゃない。イマ、あんたの魂だってこうやって何度も繰り返して、生まれ変わっているはずなんだ。魂は全部覚えているけれど、体を持った途端、一旦全部忘れて生まれてくる。」

イマ 「ふうん。」

キラリ 「あ！今、『ふうん。』って言った？」

ドク 「言った言った！確かに言った！」

イマ 「な、それが何？」

タツチ 「その『ふうん。』はセンスがよく言っていたんだ。」

イマ 「そうなの。」

タツチ 「ちよっと、センスだった頃のことを思い出したね。」

イマ 「・・・うん。」

タツチ 「シコウはね、一回死んだの。26歳の冬。」

イマ 「に、26歳？私、そんなに早く死んじゃうの？」

ドク 「早いかどうかは判断が難しいよ。」

キラリ 「私もドクも16歳で死んだ経験があるからね。」

イマ 「あ、そうか・・・でも26歳か・・・。」

タツチ 「まあ、聞いてよ。26歳のイマは人生に悩んでいた。そう、まるで今のイマみたいに。」

イマ 「また悩むのー？やだなあ。」

タツチ 「そう、なんか分からないけど、イマはずっと悩んでる。センスの時は悩むことなんてなかったのに。」

イマ 「ふうん。」

キラリ 「未来のイマは一生懸命就職活動をしてやっとの事で入った会社に絶望するんだ。」

イマ 「ええ〜！」

ドク 「そこで転職を考える。だけど、転職活動も全然上手くいかない。」

タツチ 「そもそも自分が何がしたいのかが分からない。」

イマ 「エエ〜！今と一緒！全く一緒の状況！」

シコウ、トボトボと歩いてくる

大きな音

ドーーーーーン！！

シコウ 「……え？」

シコウ 「……え？」

シコウ 「……私？」

シコウ、振り返る

そこには自分の体が

シコウ 「え？ええ？そこで、倒れているのってもしかして……私？いや、もしかしなくても、私だよね？」

シコウ 「何？なに？何??？」

シコウ 「わっ！」

3人の精霊がシコウの前に姿を表す

キラリ 「あ！久しぶり！」

タッチ 「見えた見えた！」

ドク 「お疲れ様ー。」

シコウ 「何？どういうこと？」

キラリ 「痛くなかった？思いつきりぶつかったでしょう。」

ドク 「運転手さん、可哀想に。」

タッチ 「まあ、誰がどう見ても、あんたの不注意だよ。」

シコウ 「不注意？……あ！」

シコウ 「私、もしかして、赤信号に突っ込んだ？」

3人、大きくうなづく

ドク 「聞こえなかったの？クラクシヨン？」

シコウ 「全然聞こえなかった・・・。え、て、ことは。」

キラリ 「はい、まさに今、あなたは死にました！」

シコウ 「うそ・・・。」

タッチ 「半分嘘。でも半分本当。」

シコウ 「どういうこと？・・・あ。」

シコウは、天を見上げる

シコウ 「何あれ?! ステンドグラス? すごい! 教会みたい！」

ドク 「教会みたいなんじゃなくて、教会がこっちに寄せてるんだけど。」

シコウ 「キラキラしてる。本当に綺麗。」

キラリ 「行く?」

シコウ 「行きたいなあ。」

ドク 「戻ってもしんどいだけだしね。」

タッチ 「あ、蘇生しようとしてる。」

ドク 「どうする?」

シコウ 「なんだか、今までのしんどかったものが全部が癒される気がする。」

キラリ 「気がするんじゃないかって、実際に癒されてるんだよ。向こうへ行けば全てが癒される。」

シコウ 「行きたい。もう戻りたくない。」

タッチ 「いいようだね。」

シコウ 「うん・・・あ、なんだろう。これ。」

キラリ 「何?」

シコウ 「私が着てるこれ、こんな色してたっけ?」

タッチ 「あ・・・。」

ドク 「そのワンピース。」

キラリ 「本当だ。良く似てる。」

シコウは真っ白のワンピースを着ている。

シコウ 「そうだ。私は今から、高校の同窓会に行く予定だったんだ。普段着ないワンピースなんか着ちゃって。」

シコウ 「高校か……。」

ドク 「思い出してる。」

シコウ 「懐かしいな。仲良し3人組。この横断歩道の手前でよく話をした。何回も信号が変わるのを見送って。二人は元気にしているかな。もう、随分会っていないや。」

シコウ 「……会いたいな。」

タッチ 「会いたい？」

シコウ 「楽しかったな。毎日、幸せだったな。」

タッチ 「悩みはあった？」

シコウ 「あったあった、もちろん。結局何がしたいのか、分からないままだったな。」

シコウ 「今はまた、違う事に悩んでる。」

ドク 「違うことか……。」

シコウ 「ずっと考えてる感じ。頭の中をぐるぐるくるくる。」

タッチ 「本当だ。悩みの周波数が異様に高い。」

シコウ 「悩みの周波数？」

タッチ 「こんなに頭を使って。疲れるでしょ。」

シコウ 「うん。頭は常に痛い。」

タッチ 「あなたの名前はシコウだね。」

シコウ 「……。」

キラリ 「ねえシコウ……そのワンピース。私には、紫に見えるよ。」

ドク 「ちょっと、キラリ。」

キラリ 「私、シコウにもっと前のことも思い出して欲しい。」

シコウ 「ここは紫。ここはピンク。この裾は黄色にしよう。」

タッチ 「思い出してる。」

シコウ 「ここは、もっと短い方がいいな。」

シコウ、スカート裾をまくる

まるで、センスがそうしているかのように

シコウ 「この方が、私らしい。」

キラリ 「本当だね。」

シコウ 「ねえ、あなたたちは、誰？」

3人の精霊は顔を見合わせる

シコウ 「なんだか、ずっと前から知っているような。」

3人の精霊はにこやかに微笑む

シコウ 「ずっと一緒にいたような。」

タッチ 「そうだよ。その通りだよ。ずっと一緒におりました。」

シコウ 「・・・。」

キラリ 「誰かと聞かれると。」

ドク 「あなたに憑いている精霊とでも言いましょうか。」

シコウ 「私が事故に遭って死んだから、見えるようになったのね。」

タッチ 「半分正解で半分不正解。」

キラリ 「昔はずっと見えていたんだよ。私たちのこと。」

タッチ 「それに、厳密にはまだ完全に死んだわけじゃない。」

ドク 「まあ、3分の1正解ってところだね。」

シコウ 「……。」

タツチ 「ああ、シコウがまた考え込んだじゃう。」

キラリ 「いいんだよ。分からないことは分からないままで。」

シコウ 「……。」

キラリ 「ん？」

シコウ 「……。」

キラリ 「ねえ、大丈夫？」

シコウ 「……私さあ、ずっと、引かれたレールの上を歩いてたんだ。」

タツチ 「振り返りだ。」

キラリ 「え。」

タツチ 「静かに、シコウの中で振り返りが始まった。」

シコウ 「レールの上を歩いていたらある日突然、何もかも、本当に何もかもが思った通りにいかなくなってる。」

シコウ 「何となく大学まで行って、卒業した途端、そのレールが消えちゃった。」

シコウ 「しかもさ、色んなことを考えながら歩いていたら、突然、こうやって……死にかけてる。」

シコウ 「これからどうしよう。どうやって生きていこう。なんて考えてたら、これからなんて無くなっちゃった。」

シコウ 「……会社に入ったら当たり前前に生活は安定して、結婚して、家庭を持って、そうやって生きていくんだと思ってた。」

ドク 「当たり前。」

シコウ 「だけど、全然。当たり前前なんかこの世界にはなかった。」

シコウ、自分の頭に埋め込まれた「チップ」を取り出して

シコウ 「この「チップ」も、10年前には形もなかった。こんな世界になっっているなんて想像すらしていなかった。」

シコウ 「……今やこれがないと生きていけない。」

シコウ 「当たり前前なんかこの世界にはなかった。」

タツチ 「シコウ、大丈夫？」

シコウ 「ちょっと、考えたい。」
タッチ 「オーケー。」

シコウは静かに姿を消す
タッチはシコウの後を追う
遠くでシコウと3人の精霊とのやりとりをみていたイマ。

イマ 「頭から、あれは何？」

キラリ 「〇チップ。今から10年後にはほとんどの人があれを頭に埋め込む世の中になる。」

イマ 「信じられない……。」

ドク 「でも、それ。イマが持つてるスマートフォンだって。」

イマはふと、自分のスマートフォンを見つめる。

イマ 「こんなもの、誰も想像していなかった。」

イマ 「今や当たり前になってる。」

イマ 「当たり前なんか、この世界にはない。」

キラリ 「そういうこと。」

イマ 「私がこれから生きていく世界」

ドク 「当たり前なんかじゃない。」

イマ 「26歳で、死ぬ。」

タッチ、シコウのところから戻ってきた。

タッチ 「それはどうか分からない。」

イマ 「え。」

タツチ 「今、シコウが考えてる。もしかしたら、何かに引っ張られるかもしれない。」

イマ 「自分の意思で体に戻れるの？」

タツチ 「もちろんそれは分からない。何かに引っ張られないと戻ることにはできない。だけど、自分の意思がなかったら決して戻ることにはできない。」

イマ 「ふうん。」

キラリ 「ねえ、イマ、どうして私たちがまた見えたと思う？」

イマ 「え、えっと……。」

ドク 「シコウ、いやミライからのメッセージを感じない？」

イマ 「未来からのメッセージ……。」

タツチ 「ここに集中して。」

3人の精霊は皆、胸に手を当てている

イマ 「……感じる。」

イマ 「みんなを送ってくれたのは……シコウ？」

3人の精霊は皆、一様に微笑んでいる

イマ 「これは？」

一枚の手紙がイマの元に届く

イマ 「何も書いてない。」

ドク 「忘れたの？イマ、君の感覚はない。」

イマ 「え？」

キラリ 「目で読むんじゃない。」

タッチ 「私たちに貸して。」

3人の精霊はイマから手紙を受け取る

タッチ 「16歳の私へ。」

イマ 「シコウからだ。」

3人の精霊は手紙を読み出す

精霊 「16歳の私へ。」

今、私は生きるか死ぬかのところにいます。

このまま死ぬかもしれないし、蘇るかもしれません。

10年後、こんなことになるなんて想像していなかったでしょう。

だけど、まさに、そんなことばかりの世界がこれからのあなたに待ち受けています。

私の言葉をよく聞いて、そして心に留めてください。

この世界に、当たり前は存在しません。

思ってもみない事が次々に起こります。

対処の仕方を教わっていないような事件がどんどん起こります。

その解決策は全て、自分で考え、選んでいかなければなりません。

厳しいです。

日本という国は、とっくに成長を終え

ビックリするスピードで格差が広がっていきます。

安定すると言われていた職業がどんどんなくなり

有名な会社がどんどん潰れていきます。

本当の安定は、世界に存在しません。
信じてください、存在しません。

本当の安定は、どこにあると思いますか。

本当の安定は、あなたの中にあります。

本当に進むべき道は、あなたの中にあります。
本当の世界は、あなたの中にあります。

信じるべきものは

学校でも、先生でも、両親でもありません。
自分の中にあるものです。

そのために

たくさん勉強してください。

勉強というのは、

学校で教わる勉強ばかりではありません。

今、あなたが持っているスマートフォン。

その中にたくさんさんの情報が入っていませんか。
その便利なツールを使って、

どうか、たくさんの人に繋がってください。

たくさんの知識と情報を身につけ
それを自分の中で噛み砕き、
自分の意見を持ち、
そしてそれを、世界に発信してください。

そうすることで、

自分の目標やなりたい自分、
自分の心の声を聞く事ができます。

私も気がつかなかった。

こうやって、一旦死にかけてみないと分からなかった。

だけど、今ならはっきり言える。

あなたが思い描いているような世界は来ない。

今のあなたには想像もつかないような未来が待っています。
だから不安になっても仕方ない。

早く、そのことに気づいてください。

未来のあなた。シコウより。」

イマ 「不安になっても仕方ない。」

タツチ 「思い出して、イマ。未来のことを考えたって意味がない。大切なのは、今だよ。」

イマ 「そうか。」

キラリ 「シコウは私たちという媒体を通してメッセージをイマに伝えた。」

ドク 「イマに伝わったから、きつと・・・。」

イマ 「これからの人生は私次第。」

タツチ 「その通りだ。」

キラリ 「タツチ、そろそろ。」

タツチ 「そうだね。」

イマ 「何？」

タツチ 「ねえ、私、前に詐欺師をしていた事があった。 って言ったでしょう。」

イマ 「うん。」

タツチ 「魂は続いていくからね、体を持たなくなっただけで、その時に騙した人たちへ、ちよつとした罪滅ぼしをしているの。」

イマ 「名付けた。」

タツチ 「勘が鋭くなったね。」

イマ 「私もどこかで、タツチに騙されたの？」

タツチ 「そういうことになるね。」

イマ 「えー。 そうだったんだ。」

タツチ 「人の心理が読める力を使って人を騙していたんだ。」

イマ 「そうなんだ。 じゃ、私の心も読めるの？」

タツチ 「なんとなくね。 だから、今のイマにとって大切なことを思い出させることができる。」

キラリ 「イマにも名前を。」

タツチ 「わかってる。」

「イマ、今のあんたの名前は“イノチ”だよ。 それ以上でも以下でもない。」

イマ 「命。」

キラリ 「大事にしなよ、今のその命。」

ドク 「イマのイノチ。」

イノチ 「ありがとう。」

キラリ 「じゃあ、そろそろいきますか！魂の洗濯へ。」

イノチ 「え。」

キラリ 「じつとできない性分だね。それに、そろそろイノチも戻ったほうがいい。」

イノチ 「え。」

ドク 「そうだね。イマ、じゃなくて、イノチ、またね。」

イノチ 「ちよっと待って。ねえ、また、会える？」

タッチ 「ふふ。きつとずっと近くにいますよ。」

イノチ 「そうか。」

キラリ 「車には気をつけて。」

イノチ 「うん。ありがとう。」

タッチ 「こちらこそ。」

イノチ 「あの〜・・・。」

タッチ 「ん？」

イノチ 「どうやって・・・帰るの？」

ドク 「そうかそうか！わかんないよね！」

キラリ 「ごめんごめん、置いていくところだった。」

タッチ 「今、イノチはちよこっと体から離れてる状態。幽体離脱って言えばわかりやすい？」

イノチ 「エー！」

キラリ 「大丈夫。ちゃんと戻れるから。」

タッチ 「その道をまっすぐ行って、角を曲がる。ずっと歩くと噴水があるから、噴水の周りを左回りに三回回って・・・。」

イノチ 「な、なんか大変そう。」

タッチ 「うーそ。冗談。」

イノチ 「はい？」

タッチ 「教えなくたって、イノチは自分の体に戻れるはずだよ。」

イノチ 「え？」

タッチ 「言ったでしょ。直感で歩いておいき。自信を持って、こっちだと思った方に進むの。」

キラリ 「できるはずだよ。」

ドク 「センス、思い出したでしょ。」

タツチ 「必ず、たどり着けるよ。」

イノチ 「・・・うん。」

タツチ 「イノチは、センスも思い出したし、シコウからもメッセージをもらったんだよ。」

イノチ 「できる気がする。」

ドク 「うまく帰れたら、また教えてね。」

イノチ 「どうやって？」

タツチ 「もう、イノチはすぐに忘れる。いろんな事を思い出して、いろんな事を知ったんだから、別に次からは、わざわざ幽体離脱しなくたっていつでも会える。」

ドク 「ほらもう行かなきゃ。そろそろ日も暮れてあの場所も寒くなってくる。」

タツチ 「じゃあね、イノチ。」

イノチ 「うん。じゃあね！」

転

ベンチに座っているイノチ

イノチ 「戻ってきた・・・。」

イノチ、ほつぺたをつねる

イノチ 「痛い！・・・感覚、戻ってる！ん？感覚？」

イノチ、スマートフォンで何かを調べる

イノチ 「感覚・・・センス。」

イノチ 「・・・夢じゃないよね。」

イノチ、あたりを見渡す

キラリが駆け抜ける

イノチ 「あ！キラリ！」

キラリ、手を振ってはけていく

イノチ 「夢と思うかどうかは自分次第。でも、私は明らかにさっきまでの私とは違う。」

イノチ 「未来のことを考えたって仕方ない。大事なのはイマ。イマのイノチ。」

ドクが横切る

イノチ 「魂の旅は続く。時々孤独を感じても、私は歩いていく。」

タッチが手を差し伸べる

イノチ、胸に手を当てて

イノチ 「直感を信じて進めば、必ずたどり着ける。」

イノチはおもむろにノートを取り出し、中に文字を書き込んでいく
時にスマートフォンで調べながら言葉を書き足していく

物語は終わりを迎える

発行元 せんすおぶわんだあ

発行日 2017年9月17日

ご利用について

作品の上演などについては、WEBサイトのコンタクトよりお問い合わせください。

著作権は せんすおぶわんだあ に帰属します。

*本書の内容は予告なしに改訂となる場合があります。

WEBサイト せんすおぶわんだあ

<https://www.sens-of-wonder.com>

Twitter

[@Sens_of_wonder](https://twitter.com/Sens_of_wonder)

